

第51回 厚木市広報写真コンクール 審査結果

一般部門



市長賞

「あじさい階段」

原田良徳さん

講評（三栖幸生氏）

厚木市はみどりと花のあふれる街、白いアジサイに囲まれて階段を上る赤い服を着た少女。その先に何かがあると思わせる。

一步一步上る後ろ姿から、希望に満ちた素晴らしい人生と未来が想像できる。厚木市の未来とともに。

少女の赤とアジサイの白のバランスが素晴らしい。シンプルだが巧みな絵づくりだ。作家の力量を感じる。



神奈川新聞社賞

「お家に帰ろう」 志村利夫さん

講評（石本健二氏）

秋の夜だろうか。家路を目指す親子の温かな雰囲気伝わり、楽しい子どもの声が聞こえてきそう。右側のメタリックな青白い光と、左側の温かみのあるオレンジの明かりが、テクノロジーと人情を併せ持つ厚木らしさを象徴しているかのようだ。見慣れている厚木中央公園入り口付近が素敵な物語の舞台になった。



「青空に向う鯉」

池田利光さん

講 評 （三栖幸生氏）

緑あふれる公園、青く澄み切った空に多数のこいのぼりが春風を受けて舞っている。こんな景色が見られることに幸せを感じる。泳ぐ姿を左下から右上に斜めに入れた画面にすることで躍動感とスケールの大きさが出た。素晴らしいカメラポジションだ。

「晩秋の彩り」

西山昌敏さん

講 評 （三栖幸生氏）

まさに晩秋の彩りだ。畑の花々が美しい。実った柿の実が更にその彩りにアクセントを加えた。太陽の光もベスト。なんと華やかな場所だ。この場に行って景色を堪能したい。シンプルに畑のみの表現もあったと思うが、あえて大きな柿の木を入れたことで単純な花畑に変化をもたらし熟した柿の実からも季節感が出た。



「文化祭の主役」

内野秀明さん

講 評 （三栖幸生氏）

市内の高校の文化祭、見学する者の衣装がカラフル。出演者かもしれない。サークルやグループ単位の衣装が色とりどりで画面全体を暖かくしている。全員で盛り上げようとするのが伝わってくる。当日の雰囲気分かる。若い人たちが青春を謳歌して、厚木を若々しい街にして欲しい。



「年の瀬恒例」 村山修さん

講 評 (三栖幸生氏)

家族連れて地域のイベントに参加した一家。怖そうに杵を持つお姉ちゃん、お父さんもお母さんも心配そう。妹さんだろうか、自分もつきたそうだがお母さんに抱きかかえられて止められたか。イベントに参加することは地域を盛り上げること、そして厚木市全体が盛り上がる。一人でも多くの市民に参加して欲しい。この家族にとって思い出の一日になったと思う。思い出は写真を通して何時までも残る。

「動き始めた春」 町野正樹さん

講 評 (三栖幸生氏)

河川敷は菜の花が満開、土手の桜並木は一斉に咲き誇る。花々に囲まれて家族ぐるみと思われる人たちが宴を張る。土手に行く人も桜を楽しみ、緑と花に囲まれて宴を張る人たちも春のひと時を過ごす。春の厚木の定番の景色。良いアングルで撮られた。

厚木の素晴らしさが画面から伝わってくる。緑あふれ、花々が咲き誇る。自然あふれる街、厚木だからできる家族のひと時だ。作品を観ているだけで幸せを感じる。



「親子の絆」

村田 義一さん



講 評 (三栖幸生氏)

手慣れた写角で若いファミリーを捉えた。常香炉越しに見える父親と母親に両手を繋がれて参拝する子ども。慎重に歩を進める幼子と見守る二人。

この子の未来と家族の幸せを祈ったのだろうか。若い人たちが節目に寺院を参拝する習慣は良いことだと思う。

定番のフレームだが写っている若い家族が良い。常香炉の形にこだわりすぎた感がある。必要最小限を入れるだけでも表現できたと思う。

「里神楽がやってきた」 大坪 政文さん



講 評 (三栖幸生氏)

厚木の伝統芸能を観客の一人として撮った。常にカメラやスマホを持参し、関心のあるものにレンズを向けることは大切なこと。市内には多くの伝統や芸能がある。カメラを持つ一人ひとりが出会った出来事にレンズを向け、記録し記憶に残して欲しい。

地域の祭りで披露された伝統芸能。舞台では小さな子どもも演じている。演者は懸命に演じ、観客が見つめる。夕闇の雰囲気も表現出来た。カメラを持つ作家の思いも伝わってくる。